

「器量」の続貂

欒 竹 民

はじめに

「器量のよい」という表現は現代日本語ではよく用いられるものである。いわば、「器量」は日常用語として使用されていると言えよう。一方、その出自となる中国語には斯様な意味が見られないようである¹。さて、「器量」という漢語はいつの時代にどのように日本語に移入したのか、また、日本語に入ってから如何に使われ、現代日本語の如く中国語と違った意味に変容してきたのか。これらの点を巡って、先行研究²において知見に富んだ論述が為されているが、尚、再考する余地が残る。主として次のことが指摘できる。日本文献を中心として論考を行い、鎌倉時代以前の「器量」の意味用法について「特定の職務を果たすことのできる能力・力量」、「そのような能力・力量があるさま」と記述されているが、中国語との比較を施さなかったため、その意味の由来は何処にあるのか、果たしてその通りだったのか、また、中国語との異同はなかったのか、あった場合は何時の時代からなのか、等の点についての考究は不充分であるように思われる。更に、「器量」のよみと表記の消長についても検討に至っていない。小論³では、先行研究を踏まえながら中国語との比較を通して鎌倉時代までの文献を主軸に、主に次のことについて先行研究に補足を加えたいと思う。一つは「器量」の意味変化の時代、プロセス及び文献群を明確化することである⁴。もう一つは中国語の意味との関わりを考察しつつ、「器量」が「才徳兼備」⁵という意味の究明と共に「器用」との意味的示差性についても言及することである。

次に先ず「器量」の典拠である中国語を取り上げて見よう。

I. 中国文献における「器量」

今回、調査した中国文献と日本文献については巻末にある検索文献に記してある拙稿を参照されたい。中国文献は日本文献と同様、その表現形式、内容、撰者等に基づいて散文、韻文及び仏書に大別して調べたところ、「器量」の所在が韻文には見えなかった。以下、検出した僅かな用例を列挙しながら「器量」の意味用法について検討してみる。それによって日本語における「器量」の淵源が分かると共に意味の異同も明らかになる。

先ず管見に入った限りの初出例かと思しき「器量」を挙げて考察する。

- 1、唯齊酒不貳、皆有器量（鄭玄注：酌器所用注尊中者数量之多少、未聞。孔穎達疏：未聞、未聞升數）（周禮、天官、酒正）

「器量」は注釈に依ればそれを構成する兩字の字義の示すように、器或いは酒器等の容量を表すことに用いられる。つまり、容器に満たしうる分量、容積という意味となる。これは「器量」の原義と考えられて、具象的に用いられている。次の例も同様である。

- 2、人物之生、天賦之以此理未嘗不同、但人物之稟受自有異耳、如一江水你將杓去取只得一杓、將碗去取只得一碗、至於一桶一缸各自隨器量不同、故理亦隨以異（朱子語類卷四、性理93⑦）

「器量」は桶、缸の大きさに応じてその容量が異なることを示している。これを以て「人物」の稟受した「天賦」の相違が存在していることについて力説しようとしている。その原義に対して、後掲の例のように、人の評価、讃頌等において喩えて用いる「器量」が登場して、現在に至った。1と2の例は二例とも容器、容量について説かれている内容である。対して、次の例は物ではなく、人間の品評に関わる「器量」である。それは後漢に一世を風靡した、名儒を数え上げた八顧の一人である郭有道（郭泰）の死を悼むために、同志達が共に石碑を立て、蔡邕が筆を取った墓碑銘に現れる「器量」である。蔡邕が碑文において郭有道の学問と徳性を惜しみなく讃えている。

- 3、先生誕應天衷、聰睿明哲、孝友溫恭、仁篤慈惠。夫其器量弘深、姿度廣大、浩浩焉、汪汪焉、奧乎不可測已（文選五十八卷（後漢）蔡邕、郭有道碑文）

例中の「器量」は、対人評価の表現としてその共起する述語「弘深」及び前文の「聰睿明哲、孝友溫恭、仁篤慈惠」という才能、人徳を表象する内容から郭有道の度量、心の広さ、才能、いわば才徳兼備という意味として用いられていると解される。更に、『文選』と言えば、「書は文集・文選」（『枕草子』）、「文は文選のあはれなる巻々」（『徒然草』）とあるように、上代の日本に伝わり、日本文学の発展にも大きな影響を与え、奈良時代に貴族及び文人墨客の教養として必読の対象となっていた。後述の奈良遺文にある「器量」は例3の『文選』から摂取した可能性が高いかと推察される。

例4の「器量」は延康元年（220）に蜀を背き部局四千余家を率いて魏に帰順した、「将帥の才、卿相の器」と属目される孟達に与えた魏文帝の書簡に現れている。その書には孟達の来降を、首を長くして待っている心情の吐露と共に、孟達の素晴らしい人物像についても絶賛していることが随所に見られる。

- 4、聞卿姿度純茂、器量優絶、當聘能明時、取名傳記（魏文帝與孟達書）

「器量」は例3と同じく人物評価に用いて、その形容表現である述語「優絶」及び前文の「姿度純茂」や『三国志』蜀書十にも「魏文帝善達之姿才容觀」と記してある魏文帝の孟達に対しての評価とを合わせて勘案すれば、才能、能力、気質という対人評価の意味を表していると同時に、孟達の容貌についての評価をも伴っているように思われる。以下

の用例はいずれも前出の例の3、4と同じ意味で用いると考えられる。

- 5、玩（陸曄の弟）字士瑤、器量淹雅、弱冠有美名、賀循每稱清允平當（晉書、列傳四十七卷、陸曄傳）

cf、衛軍將軍、尚書右僕射臣高肇器度淹雅、神賞入微（魏書、樂志百九卷）

「器量」はその共起する形容詞の述語「淹雅」（学識が高く品性、教養が雅やかである）の意味と賀循の「清允平當」（穏やかで心の広い）という好評から参考例「器度」と同じく、陸玩のおおらかさ、懐の深さを表している。

- 6、孟東野、出門即有碍、誰謂天地寬、吳処厚以渠器量徧窄、言乃尔（宋、吳開、優古堂詩話）

孟郊の詩「贈別崔純亮」にある「出門即有碍、誰謂天地寬」に対して詩話の作者が「器量」を用いて批評を下している。述語の「徧窄」からこの「器量」も孟東野の度量という意味を表している。

- 7、楮中郎向淹雅有器量（明、李贄、初譚集師友八論人）

楮向（字景政）は南朝梁の北中郎廬陵王長史に拔擢され、在官のまま死去した。彼は、広く学問して立ち居振る舞いが美しく、眉目秀麗だったため、朝廷に並ぶたびに人々の羨望的となったと高評を博している。その評価を併せて考えて「器量」は楮向の学識、才能、人徳を示すと共に外貌的な含意も伴ってくる。

一方、外典に止まらず内典にも「器量」の所在が見られるが、意味は上記の外典のそれと変わらないようである。。

- 8、是菩薩於未來受化衆生終不疲厭。如其心根如實能知。隨其器量而為說法（大正新修大藏經、第13冊大方等大集經卷第二十九202b⑳）

- 9、世尊無有分別隨其器量善應機緣為彼說法是（同上、金光明最勝王經疏卷第二207c⑳）

二例とも衆生の力量、能力という意味として「器量」が用いられている。

以上、中国文献から検出した「器量」の用例を取り上げてその意味分析を行ったところ、「器量」の意義は以下のように記述できるかと考えられる。

（一）器物の容量、容積

（二）才能も含めての度量、人徳

と二つに大別されるが、（二）は本義の（一）を土台に器の容量から人間を評価するのに比喩的にその人の心の広さ、才幹のあること等に用いられるようになった。尚、上述した如く対人評価に用いられる「器量」は、その度量のあることや心の広いことという内面性が往々にして評価される人が何か（行い、振る舞い等）を通して表出され、いわば目に見えない内在的なものを可視化するようになって、外見的なものとして自ずと評価する側の目に留まったりすることになるかと推察される。さもないければ、人の「心の広さ、度量」というような内面的なものが評価する人には分かりかねることであろう。かかる語

用の特徴は日本語における外見的な意味発生の契機となると考えられる。つまり、評価者はその語用の特徴をもとに被評価人物の内面性を含めて様子、外貌にも着目するようになり、それが評価対象となって外見的な意味の産出につながると措定されよう。これは次の日本語の「器量」に関する考究から察知されよう。また、「器量」と共起する、様態等を表す形容表現の「弘深、優絶、淹雅」等の述語使用が下記の日本文献における「器量」に対しての「イカメシ」との対応関係の成り立ちに関わる場所もあると考えられよう。

以上の考察を通して、中国語の「器量」の意義は上記の現代日本語の「器量のよい」の「器量」と明らかに違っていることが判明した。次項ではその現代日本語の「器量」の意味の産出等について日本文献における「器量」に目を注いで検討してみたい。

Ⅱ. 日本文献における「器量」

日本文献を和文、漢文及び和漢混淆文に分けて調査したところ、今回管見限りの日本文献（奈良、平安、鎌倉時代）から検出した「器量」はその使用状況が下記の表の通りである。

器 量			
用例数	文 献	文章ジャンル	時代
1	寧楽遺文	漢文	奈良
1	続日本紀		平安
1	日本三代実録		
2	朝野群載		
1	扶桑略紀		
13	平安遺文		
2	中右記		
2	長秋記		
1	台記		
6	吉記		
2	山槐記		
1	大日本国法華験記		
2	拾遺往生伝		
2	後拾遺往生伝		
1	本朝新修往生伝		
1	扶桑集		
1	久遠寺藏本朝文粹		
1	高山寺本表白集		

器 量			
用例数	文 献	文章ジャンル	時代
3	猪隈閑白記	漢文	鎌倉
3	平戸記		
1	三長記		
6	岡屋閑白記		
37	玉葉		
15	明月記		
1	後伏見天皇宸記		
13	吾妻鏡		
254	鎌倉遺文⑦		
6	高山寺古文書		
6	高野山文書（1、4）		
1	弟子僧往来集		
1	手習覚往来		
2	雑筆往来		
1	賢済往来		
1	百也往来		
1	新札往来		
2	今昔物語集	和漢混淆文	院政
22	愚管抄		鎌倉
2	歎異抄		
20	沙石集		
5	正法眼藏随聞記		
3	保元物語		
2	平治物語		
4	延慶本平家物語①		
3	覚一本平家物語①		
456	合 計		

（注：○の数字は「機量」の用例数である）

とあるが如く、鎌倉時代まで「器量」は使用頻度の差こそあれ、各文章ジャンルに亘って使用されている。次に先ず日本文献における「器量」のよみと表記について考えることとする。

(1) よみと表記

下記の古辞書や訓点資料等から「器量」は「キリヤウ」と音読みであることが分かる。

- ・器量（声点略）美人分₇ キリヤウ（前田本色葉字類抄下61ウ⑦）
- ・器量キリヤウ（黒本本・饅頭屋本・易林本節用集、伊京集）
- ・非_三唯悦_二コフノミ_一當_レ時之器_一量_二を_一（久遠寺藏本朝文粹卷二17⑧、片仮名は傍注、平仮名はヲコト点、以下同）

とあるように、「キリヤウ」と音読みされているが、一方

- ・威猛イカメシ 器量同（前田本色葉字類抄上14ウ⑤）
- ・可畏イカメシ 器量同（尊経閣善本温故知新書卷上ノ上14オ④）
- ・器量イカメシ（易林本節用集）

と記してあるように、「イカメシ」との対応関係も出来上がっている。つまり、中国語出自の「器量」は日本文献において「人倫部」の善人分（山田氏、浅野氏の研究に依れば）の漢語として「キリヤウ」と音読みされ、一方、「イカメシ」という形容詞の漢字表記語として用いられていたのであると考えられる。この点については鈴鹿本『今昔物語集』から「器量」は九例検出できたが、九例とも「イカメシ」の漢字表記語として表出されているように思われることから示唆される。換言すれば、日本文献における「器量」は「キリヤウ」という音読みのみならず、「イカメシ」とも訓読され、その「イカメシ」という意味としても使用されて、中世に至っていた。つまり、「器量」は出自たる中国語と異なり、既に『前田本色葉字類抄』の成立時代に「イカメシ」という意味を表し、外見の意味特徴を持つようになっていっていると言えるであろう。

一方、『前田本色葉字類抄』の善人分に配分されている語は「器量」の他に「淡水 君子 英才 叔人 衆望 人望」等も掲載されている。それらの語義から推して善人分に属する音読み「器量」は前述した中国語の（二）の意義と重なっているように見える。しかし、それは訓読み「^{イカメシ}器量」と比しては両者の違いが浮かび上がってくる。この点については後述において触れることとする。

亦、「器量」の表記は平安時代まで「器量」のみであったが、鎌倉時代頃から「機量」という新たな表記が登場するようになった。「機量」は、その「機」が「器量」の「器」と両字が日本語において音通することと、日本語において「器量」の原義を失ったこととにより、新たな漢字表記語として生まれたであろうかと推定される⁸。

- ・斟酌勤否、為^{イカメシ}機量_二定其仁_一（鎌倉遺文5905条）

△殊扱器量为其仁、師資相承讓補之（同上537条）

とあるが如く意味用法は変わらないものの、表記は異なっている。次の和漢混淆文の例も同様であると看取される。また、『太平記』で写本によって同一箇所が「きりやう」と「機量」と表記されていることから「機量」は「器量」との相関関係が分かるであろう。これは明らかに「機量」が「器量」の異字表記に過ぎず、その同義異形語であることを

裏付けている。

- ・ラムグヒ、サカモギ引ヲトシ、大縄小縄キリ落ス。アハレ機量ヤトゾミヘタリケル（延慶本平家物語第五本下203②）

△溯瀬ヲワタル器量ノ馬ウスバミモヨモ劣ジ。ウスバミヲ給ハリ候ヘトテ第二ノ御馬ウスバミヲゾ給ハリタリケル（同上189⑨）

- ・舊主先帝ノ御追念ヲモ休メ進ラセラルベキ御機量ニテ御坐トテ（旧日本古典文学大系 太平記巻三十四、銀嵩軍事付曹娥精衛事291⑭）
- ・旧主先皇の御追念をも休めまゐらせらるべき御機量にて御座しませばとて（日本古典文学全集太平記巻三十四、南朝の諸卿分散の事165⑩）

△きうしゆせんていの御ついねんをも、やすめまいらせらるべき、御きりやうにておはしますとて（土井本太平記巻三十四544）

故に以下は「機量」を併せて考察の対象とする。

続いて時代別、文章ジャンル別に「器量」の意味用法を中心に考察を進めて行きたい。

(2) 奈良時代

管見に触れた奈良時代文献における「器量」は次の一例のみであるが、日本語への進入が早かったことを物語る。

- 1、然皇子器量不足與謀大事更欲沢君歴見王宗（寧楽遺文、家傳上875下⑬）

この「器量」の意味については多くの国語辞書に「才能、能力、力量」と語釈されているが、帝王学の亀鑑として尊重される『寛平御遺誡』（現存する残闕が十九条からなる）において「莫淫万事、責躬節之、莫迷愛憎、用意平均、莫由好惡、能慎喜怒、莫形于色」及び「多受諫正」と天子たる徳行等について論されている。いわば、守るべき君徳とも言えよう。それに拠れば、文中の「皇子器量」は単に物事に役立つ才能、力量に止まらず、皇子としての人徳、度量をも含めての意味として用いられると理解されるのが妥当であろう。このような意味としての「器量」は次の平安時代文献に一層明らかに現れる。奈良時代の「器量」は中国語と同様、対人評価の表現としてその意味を踏襲して使用されていると言ってよい。それは名詞用法としての「器量」と共起する述語「不足」の意味用法が前記の中国文献の例6の「褊窄」に近いことから示唆される。

次に平安時代文献の「器量」について文章ジャンル別に具体例を挙げて検討する。

(3) 平安時代

ア 漢詩文

先ず中国の詩文を模倣して創作された漢詩文における「器量」について考察してみる。

- 2、八斗才多稱器量、九升情動悩夢魂（扶桑集、江相公607上④）

「八斗才」とは、中国、六朝宋の詩人謝靈運が魏の曹植の才を褒めて天下に詩の才華が

一石あるとすると、曹植がその中の八斗を占め、自分は一斗のみで残りの一斗を他の詩人が分け持っているといったとされて、詩文に秀でている才能を形容する。「八斗才多稱器量」は才識が高いから文辞才知があると称されると解される。

3、暗知器量容衡霍、愧我区区小斗筭（菅家文草、423番）

cf、黄叔度之器量、千尋聳幹（梁、昭明太子十二月啓）

参考例の「器量」は後漢の名高い黄憲の評価に使われているが、『十八史略』東漢「黄憲」においてその器量は広く深いもの、広大なる湖の如く澄まそうとも澄まず、濁らそうとも濁らないのである。どれだけのものなのか計り知れないのだ、と郭泰が絶賛した。例3の「器量」はその述語「容衡霍」の意味が参考例の述語「千尋聳幹」と類似し、その翻案を彷彿させることから、参考例のそれと同じく、心の広さ、才識という意味を示していると理解される。つまり、あなた（渤海副使大夫）の度量、学識は五岳の一つである衡山をも入れられるほど大きく高いと拝察されるが、わが小さく狭い才能が恥ずかしい限りであるという意味である。それは下記の『書言字考節用集』の「器量」に関する注釈からも窺えよう。

器量（割書き）^{キレウ}氣質美^{シテ}而有^レ能^ノ之^ヲ謂^フ。胡雲峰カ云。材之所^レ成^ル為^レ器^ノ。德之所^レ充^ル為^レ量^ノ
（十二1③言辭）

4、先^{コウ}一功之（イ名、イ父）臣、後一胤遺一種ナリ、非^ニ唯悦^ニコフ^ノハ^ニ當^ニ一時之器^ノ一（音合符）
量^ヲを、亦感襄一日之附一託（久遠寺藏本朝文粹卷二、17⑧）

「器量」はその音合符から明らかに「キリヤウ」と音読みされて、例1、2と同意で用いられていると考えられる。

5、仏法境界者、如月之満遐迤、消幽冥而照臨、似水随方円、任器量而満足、念者衆願皆成（高山寺本表白集、三位殿孔雀経御読（経脱カ）表白、389）

「水が方円に随う」という前文から後続文にある「器量」は中国語の原義—「容量」が素地となって比喩的に精進、祈願の力量を示すのに用いられているものであろう。つまり、そのような「器量」に任せて「満足」を為し、御産祈願といった「衆願」が皆成就するであろう。

以上、漢詩文から見出した「器量」の意味について考察してみたところ、「器量」は中国語のそれと変わることなくいずれも人の評価に使用されて、奈良時代に続いて中国語の意味用法を受容していることが明らかになる。これは漢詩文という文章ジャンルの性格に因由すると考えられる。続いて、同じ漢字で綴ったが、内容が漢詩文と違って日本のことを中心に書き記す和化漢文（変体漢文とも言う）に見えた「器量」を取り上げてその意味用法について検討してみる。

イ 和化漢文

6、其軍毅^{ニハ}者。省選^ニ六衛府ノ中^ニ器量辨^{ニシテ}。身才勇健^{ナ者}ヲ。擬^ニ任^{セヨ}之^ヲ（続日本紀卷二十、229⑧）

日本古代の軍団を統率した官職である「軍毅」は省（兵部省）、六衛府中から選り、その際に先ず「器量」を弁じた上で「身才勇健者」を選出して「之を擬任」する。「器量」は「身才勇健者（身体の逞しく勇ましい者）」という外貌に対して、才能、力量及び人望という内在的な意味、それを「弁ずる（わきまえる）」という意である。上記の漢詩文と同じく用いられている。

7、(貞観二年二月) 廿五日丙午、僧正傳燈法師位眞濟卒。(略)。眞濟少年出家。(略)。

從大僧都空海。受眞言教。大師海公鑒其器量。特加提誘。遂授兩部大法。
(日本三代実録、48④)

「器量」はその述語「鑒（かんがみる）」の意味と後続文「特加提誘」の文意から例6と同意で眞濟の力量、才能及び徳性を表していると理解される。眞濟は15歳のとき出家して空海の弟子となる。空海に才徳を見込まれて異例の若さでの受法、灌頂であり、当時の人々を驚かせたとされる。

8、右、件於自在房蓮光者、為金銀泥行交一切經奉行、自八箇年内書写畢、依之且為奉公、且為器量故、御經藏別当職所定也（平安遺文、2060条）

「御經藏別当職所定」の理由は「為奉公、為器量」となるが、「器量」は蓮光の才能、人望という意味として表されている。ここへきて「器量」は才識に止まらず、人徳という意味も含めていることが下記の例からも一層浮き彫りになる。

9、撰定器量可令補任三綱供僧等事、右、正直憲法無邪佞之心、敬重住僧憐愍諸人、以如此之僧侶可令補三綱也、縱雖具才芸、於帶不善之心者、不可任彼職（同上、4892条）

器量を選定して三綱供僧（寺務の実務を掌る三人の役僧）を補任すべきこととなるが、その「器量」の内実とは「邪佞の心が無く、住僧を敬重し、諸人を憐愍する」ことである。斯様な持ち主こそ「可令補三綱」となる。対して、縦しんば「才芸」が備わっていると雖も、「不善の心」を持っているならば、彼職を任すべからずである。つまり、善なる心、いわば人徳、心の広さがなければ、才芸があっても三綱補任すべきではないという文意となる。そこから分かるように「撰定器量補任三綱」の「器量」は才徳兼備という意味¹⁰を表していることが明白となり、前述した中国語の意義（二）と重なっている。

次の二例の「器量」はその共起する形容表現である述語「倜儻」の意味と前後の文意から度量、心の広さを中心に気立てのよさも付随しているという意味で使われていると解される。つまり、外見的な意味合いの派生の前兆ともなる用例と考えられよう。

10、藤原為隆卿者。器量倜儻。才気軼人（後拾遺往生伝卷下、613下③）

11、才名文学。垂其先祖。器量倜儻。不混流俗（本朝新修往生伝、691下⑩）

上述した「器量」は奈良時代に続いてその出自たる中国語と同じ意味で対人評価に使用されて、「キリヤウ」と音読みされると推定して大過なからう。対して、以下の「器量」は人の容貌、外見を随伴しながら用いられている。

12、予退出之次第參殿下、是安居之南御所也、依吉日奉見若君、誠其體甚大、為高位

器量之人也、大以感申、偏是執柄不可絶之事歟（中右記五、328上⑩）

殿下（執柄）の御所を訪れて、その若君（幼君）を奉見したところ、若君は「體甚大」のみならず、「高位器量」と評価している。「器量」は「奉見」という視覚行為から推して若君の賢明且つ上品な様子、気品を表していると解されるが、（高位に就く）器という意味も聊か読み取れる。次の例も同じく評価者の「目」を通して「器量」を用いている。

13、第五子。東大寺別当東寺長者也。見此兒之器量。殊加哀憐。年十二出家。於東大寺受具足戒（拾遺往生伝巻下、621下⑪）

つまり、例12、13「器量」は才識、能力という内面的な意味と共に外見的な側面も伴っている。換言すれば、「器量」は内在の意味合いから明らかに外在化に傾斜するようになる。これは二例の「見」という述語からも窺える。斯様な過程、いわば下地を基に、次の二例の如く、明らかに様態を表す意味として用いられる「器量」が生じたのではないかと考えられる。

14、僧都（実因）少年離家登山。弘延阿闍梨為師。常住具足房。天性聡恵。憶持無極。

容顔器量。身体強力也（大日本国法華驗記巻中、532上⑫）

後続文「身体強力」の「身体」に対して「容顔」、「強力」に対して「器量」と対応していることを併せて考えれば、「器量」は「強力」と同じく「容顔」いわば顔立ちを表すべく形容詞として用いられると理解される。その形容詞と言え、前出の『前田本色葉字類抄』に「器量」との対応関係が成り立っている形容詞「イカメシ」を想起する¹¹。「身体」が遅しく強いという「強力」に対して「容顔」が「イカメシ」、つまり勇ましく凛々しいとなる。「器量」は明らかに外見的な意味合いとして用いられ、意味の変化が起きた。例14及び次の例15のように、少年や子供の聡明や美貌を賞賛して将来性を嘱目、予見するという人物の品評は夙に奈良時代に見られている。例えば、「幼而聡明叡智、貌容壯麗」（日本書紀、神功皇后紀）、「幼而聡明叡智、貌容美麗」（日本書紀、仁徳天皇紀）等が見られる。

15、右金吾小兒送彼亭了、此十餘日坐此家中也、若君之容體甚器量也、向後有憑（中右記七、49下⑬）

「器量」は「甚」という程度副詞の修飾を受けていることから例14と同様、形容詞としての用法で（その若君の姿、振る舞いが）「イカメシ」、つまり端厳である。但し、この「器量」は勇ましいと同時に、体裁がよく整っているさまとして、立派、優れるという含意も伴っていると看取される。

以上の考察を通して平安時代文献における「器量」は文章ジャンルによって意味用法や読みの違いを見せていることが判明したかと思う。即ち、漢詩文では「器量」の意味用法は中国語のそれをそのまま摂取して「キリヤウ」と音読みされているであろうが、和化漢文の「器量」は中国語の原義を受容しつつ、さま、様態という外見的な意味も生じて恐らく「イカメシ」と訓読みされるかと思われる。形容詞としての用法が発生した。

『前田本色葉字類抄』にある「器量」と「イカメシ」との対応関係は斯様な背景があってこそ成り立ったのであろう。亦、後世の「顔立ち、見目」という容姿を表す意味発生もかかる意味変化を下地に出来たと言ってもよかろう。前述した中国語との違いが際立っている。何故「器量」には「イカメシ」という人間及び物事の様子、状態を表す外見的な意味が発生したのか。それは前述したように、中国文献、日本文献における「器量」が内在的な意味を示すと同時に、対人評価に使われる場合には外見的なことも伴うという語用特徴に一因を求めることができよう。これは上記の日本文献の「器量」と共起する「弁、鑒、見」という視覚行為の述語からも示唆される。加えて、中国文献における「器量」が「弘深、優絶、淹雅、倜儻」等のような形容詞と共に用いられることによって、「器量」とその共起する形容詞とを合わせた一つに纏まった意味概念として捉えられ、理解されたためではないかとも推測される。斯様な意味転用は認知言語学において換喩（メトニミー）¹²として注目されている。以下、鎌倉時代文献に目を向けてみよう。

(4) 鎌倉時代

先ず鎌倉時代の和化漢文における「器量」について検討を進めて行きたい。

ア 和化漢文

16、（一下官申上卿辞退并灸治事）、此上卿於事有恐、付内外、過失難遁、愚頑之性、不足器量、仍度々固辞（玉葉、承安三年2月1日）

「器量」は前文の「過失難遁、愚頑之性」と修飾語「不足」とを考え合わせると、能力、才識という意味を表し、だから、「度々固辞」したのでであると解される。

17、大神宮司者、只撰器量可被補也（略）、先例不必依功之次第、勘功程之多少、有登用事歟、然者成功之輩之中、且尋功程、且撰器量可被計任也（同上、治承二年12月7日）

伊勢大神宮司の任用に当たって「功程」（仕事の担当量）を尋ねるだけではなく、「器量」を撰ぶべきであるという意味となる。「器量」は才徳という意味として斯様な適任の人を選定して任ずることを計るべきである。

18、所借召之处之等申可進之由、云才漢云器量、不及頼業歟（同上、元暦元年8月27日）

清原頼業についての評価において「器量」が用いられているが、頼業は大外記として24年もの長きに亘り務めた。早くから藤原頼長・九条兼実等にその実務と学識を認められ、当代無比と讃えられた。その高評から「器量」は「才漢」に止まらず、人徳、衆望という意味も内包していると看取される。

19、於院主職者、阿観門跡之中、殊択器量、宜為其仁、師資相承、以讓補之（鎌倉遺文、538条）

院主職の任用条件として殊に「器量を択ぶ」べきであるとされる。「器量」は例17と同様、その職に相応しい能力、人望という意味を表している。次の「機量」も漢字表記が

異なるものの、同じ意味として用いられていると看做される。

- ・学衆補任者、更不可有矯飾偏頗、仍籌量利鈍、斟酌動否、為機量定其仁、以抽群可抽補（同上、3579条）

学衆補任に際して例19の「択器量、宜為其仁」に対して、「為機量定其仁」となる。両者は異形同義語として使用されていると考えられる。下記の鎌倉幕府の武家法とも言える『御成敗式目』に一例のみある「器量」も上記の同時代の用例と同意で用いられている。

- 20、右且^{アサキ}随^ヒ奉^{タダシ}公^{キリヤウ}之^{カン}浅^ヒ深^ヒ且^ヒ紕^ヒ器^ヒ量^ヒ之^ヒ堪^ヒ否^ヒ各^ヒ任^ヒ時^ヒ宜^ヒ可^ヒ被^ヒ分^ヒ充^ヒ（寛永五年板御成敗式目、20ウ⑤）

その任に相応しい才能、力量という意味としての「器量」となる。次の例もその職務を全うできる能力、力量という意味の「器量」である。

- 21、而実俊之身、本自依不堪公事之器量、所申預舍弟範成也（鎌倉遺文、650条）

次の「器量」は前述した平安時代の和化漢文における例12、13の意味と重なっているように用いられている。

- 22、將軍家可^キ文^メ武^メ御^メ稽^メ古^メ之^メ由^メ相^メ州^メ以^メ消息^メ状^メ令^メ諫^メ申^メサ^メ之^メ給^メフ(略)人々ノ子息^{エラビコ}中^{コロミ}撰^{ミヨミ}試^シ好^シ文^シ并^シ器^シ量^シ之^シ士^シ可^シ候^シ同^シ学^シニ趣^キ内^キ々^キ被^レ仰^セ付^ケ之^ノ云々（寛永版振仮名つき吾妻鏡、建長二年2月26日）

五代將軍藤原頼嗣が文武の稽古に励むよう、相模守北條時頼が書状で將軍家に助言を献じた。文武学習のために御家人の師弟の中から「同学」を選ぶよう指示をも下した。その学友の選抜条件としては「好文」の上に「器量之士」でなければいかならないとなっている。「器量」は文才だけではなく武勇としての素質や「イカメシ」きさまも含有している。これは頼朝の随兵の選定に当たって定めた「三徳」の一つである「容姿の整った者」からも窺える。

- 23、召^{メシ}右^{メシ}近^{メシ}將^{メシ}監^{メシ}好^{メシ}方^{メシ}於^{メシ}幕^{メシ}府^{メシ}賜^{メシ}盃^{メシ}酒^{メシ}好^{メシ}方^{メシ}盡^{メシ}野^{メシ}曲^{メシ}善^{メシ}信^{メシ}候^{メシ}御^{メシ}前^{メシ}ニ助^{メシ}音^{メシ}太^{メシ}絶^{メシ}妙^{メシ}ナリ也又^{メシ}重^{メシ}忠^{メシ}景^{メシ}秀^{メシ}等^{メシ}依^{メシ}仰^{メシ}於^{メシ}当^{メシ}座^{メシ}ニ習^{メシ}神^{メシ}樂^{メシ}曲^{メシ}兩^{メシ}人^{メシ}器^{メシ}量^{メシ}之^{メシ}由^{メシ}好^{メシ}方^{メシ}感^{メシ}申^{メシ}スト云々（同上、建久二年11月19日）

「器量」は当代一番の神樂の名人である右近將監多好方の指導を受けた重忠と景秀の音曲の才、振る舞いを示しており、多好方がそれに「感申」したとのことである。対して、次の二例は内在的な意味を殆ど失って外見の意味合いが明白に現れており、「イカメシ」き様態、つまり堂々たる様子として使用されているように思われる。

- 24、内弁左大臣着礼服取牙笏、(略)、入自幄北面西間、自兀子前着之、意氣揚々、進退叶度、礼服之器量、誰人如之哉、可感嘆、可感嘆（玉葉、治承四年4月22日）

上述した人物及びその人の容顔と共にする「器量」と異なって、「礼服」の「器量」となっている。日記の記し手の「可感嘆、可感嘆」という感服、賛美の心情を表す後続文から「礼服之器量」の「礼服」は最高の礼装を指して、その「器量」は盛装という格好または「礼服」を着用している内弁左大臣の体裁が立派に整っていることを示し

ていると解される。だから、それに対して、兼実が「誰人かこれにしかんや。感嘆すべし、感嘆すべし」と褒め称えたわけであろう。

25、御社八講屋之御簾量敷設見等、常樂会之樂器、蜜絵装束等、鑑器量随宜可被宛催云々者（鎌倉遺文、50876条）

例24と同じく、対人評価ではなく簾、樂器及び装束等の用具や器物等の「器量」となるが、それを鑑みて随宜に「宛催」すべきであるという意味となる。「器量」は物の形態がちゃんと整っているという意味で用いられている。

次の例は「器量人、器量仁、機量仁、機量物」という語形式として用いられるものである。いずれも表記こそ違えども能力、才徳のある人という意味を表していると思われる。殊に「器量人」は鎌倉時代の和漢混淆文にもその所在が確認される。それぞれ出自たる中国語には見えなく日本語の特有の表現となる。

26、且為器量人之間、彼田所職相副券契（鎌倉遺文、2426条）

27、以器量人令举達之時、不撰親疎、可致其沙汰（同上、10283条）

28、就中云公一藹、之其器量仁、相並於茲（同上、3360条）

29、学頭職、於器量仁者、雖何年不可有辞退矣（同上、11404条）

30、仍為当寺房主、持人法守寺門、有機量仁、相計可付属（同上、22126条）

次の「機量物」も同様の意味で用いられている。

31、鶯目二貫給候了、太田殿与其二人御心歟、伊予房機量物にて候ぞ、今年留候了（同上、11358条）

日蓮書状にある例であるが、伊予房は伊予阿闍梨日頂のことであり、日蓮聖人御在世当時の弟子、六老僧の一人となる。「機量物」は「器量人」と同意、伊予房への褒め言葉である。つまり、伊予房はすぐれた才能、資質をもっている人物である。亦、敬意を表する「御」を冠する「御器量」も登場して、日本語への同化の様相が浮かび上がっている。

32、猶道覚親王可令伝治門跡給也、雖聊内外表裏無御咎、入室写瓶勿論之上、天性之所受、御心操上品、殊勝之御器量也（同上、3382条）

慈円が書状で道覚入道親王を敬って、親王の才識、人徳を讃えるべく「御器量」が用いられていると解される。

以上、鎌倉時代の和化漢文における「器量」についてその意味用法を巡って考察してみたところ、平安時代の意味用法と比しては多様化を見せているものの、内在的と外見的这个基本的なところを継承していると言えよう。但し、中国語はもちろんのこと、前の時代には見えなかった新たな語形式が現れるようになった。続いて、和漢混淆文の「器量」を取り上げて考究する。

イ 和漢混淆文

先ず、『今昔物語集』における「器量」について考えることとする。『今昔物語集』（旧日本古典文学大系本、以下、旧大系本という）から二十数例の「器量」が見出されて、

全部「イカメシ」と訓読されている。尚『今昔物語集』現存最古の写本である鈴鹿本は僅か九巻の存巻となり、その中から「器量」は九例検出できたが、そのいずれも「器量キ/ク/シ/シキ/シク/シテ」のように、前掲した『前田本色葉字類抄』の「器量イカメシ」に依拠すれば、「イカメシ」の読みとなるであろう。

33、其ノ後、玄宗、常ニ氣高ク^{ケタカクイカメシ}器量^{ソノ}人ヲ見給フ。其数五百人許也（旧大系本今昔物語集巻六、第10話）

34、老僧御堂ニテ夢ヲ堂ノ庭ニ止事无ク氣高ク器量^{シキ}人々、隙无ク在マシテ皆掌ヲ合セテ堂ニ向テ居給ヘリ（鈴鹿本今昔物語集巻十二、36話）

二例とも『今昔物語集』の出典の一つである、上掲した『大日本国法華驗記』の「器量」と意味として重なって、それを踏襲したと言ってもよからう。つまり、堂々として威厳のあるという外見の意味を表している。以下の例も同様である。

35、彼方ノ軍勢器量^{シテ}可合キ様无シ（鈴鹿本今昔物語集巻五、17話）

36、亦此ノ象ヨリモ器量^ク大キナル一ノ象有リ（同上、27話）

勇ましく逞しいという意味として用いられる「器量」となる。

37、コノ御厩ニ立タル馬ヲ人ニノスル事ナシ。淵瀬ヲワタル器量ノ馬ハウスバミモヨモ劣ジ。ウスバミヲ給ハリ候ヘトテ、第二ノ御馬ウスバミヲゾ給ハリタルケル（延慶本平家物語第五本、梶原与佐々木馬所望事、189⑨）

cf、佐々木の四郎が賜はつたる御馬は黒栗毛なり。きはめてたくましが、（略）、梶原に賜はつたる摺墨もおほきにたくましが、まことに黒かりければ「摺墨」とぞ申しける（百二十句本平家物語巻九、宇治川）

cf、佐々木四郎の賜はられたりける御馬は黒栗毛なる馬の、極めて太うたくましが、（略）、梶原が賜はつたりける御馬も、極めて太うたくましが、（十二巻本平家物語巻九、宇治川）

源頼朝に献上された二匹の名馬を「所望」する佐々木高綱と梶原景季に与えられたことについて描かれている場面である。その名馬については、延慶本では「器量ノ馬」と称え、対して、百二十句本と十二巻本では「きはめてたくましき」「極めて太うたくましき」と賞賛されている。参考例を踏まえて例37「器量」は前述した『今昔物語集』の「イカメシ」という意味で名馬の力量を表していると共に立派、優れるという風貌をも含めていると理解される。

38、（鹿嶋与一ト云者）天下一ノ潜ノ上手ナリケルアヒダ、胃ヌギヲキ裕カクマヽニ、腰ニハ鎌ヲサシ、手ニハ熊手ヲ以テ、河ノ底入ニケリ。良久水ノソコニテ、ラムグヒ、サカモギ引ヲトシ、大縄小縄キリ落ス。アハレ機量^{ハカリ}ヤトゾミヘタリケル。九郎御曹司此ヲ御覧ジテ（延慶本平家物語第五本、兵衛佐ノ軍兵等付宇治勢田事、203②）

「機量」は天下一の潜水の名人芸に対しての絶賛に用いられていることから、「神技、名人、素晴らしい」というような意味を表していると看取される。例37より「立派、優

れる」というプラス評価としての意味合いが一層浮き彫りになっている。漢字表記が「器量」と相違するものの、意味としては両者が重なっているものと看做される。次の例は同時代の和化漢文に続いて度量、人徳も伴った才識、能力を表す「器量」となる。

- 39、其官に居る。是を小人といへり。小人の官にある。しばらく闕たるにはしらず共いへれば、まことに累世清花の人なりとも器量の及ばざらんには氏を継がたし。(略)。又道徳あるを君子と云。道徳なきを小人とすともいひたれば(十訓抄第三、不可侮人倫事)

次の例は適任の才能、力量という意味として用いられる「器量」である。

- 40、丸が現当二世ノ大事、只此仏事ニアリ。若実ノ導師タルベキ器量ノ人、此十三人ノ外ニテ猶ヤ有ラン(延慶本平家物語第一本、得長寿院供養事付導師山門中堂ノ薬師之事、19⑧)
- 41、かれは守文継睦の器量あり。是は万機補佐の心操あり(覚一本平家物語卷八、名虎、125②)
- 42、左大臣累葉攝祿の家に生て、万機内覧の宣旨を下さる。器量人にすぐれ、才藝世にしられたり(旧日本古典文学大系保元物語中、133①)

例42は悪左府とも言われる左大臣の藤原頼長についての評価において「器量」が用いられている。『愚管抄』には「日本一の大学生、和漢の才に富む」と、その学識の高さを賞賛しているのに対して、歴史物語『今鏡』には「左大臣はおみめもよくおはし」と、結構な美男子であることを讃えている。それらの賛辞を考え合わせると、文中の「器量」は才識のみならず容貌も含めている。それが「人に優れる」と解される。

対して、下記の例は、上記の『今昔物語集』のように形容詞ではなく、名詞として人の容姿、風貌等、いわば外見、外貌を表す意味に傾斜している「器量」が用いられているように思われる。

- 43、朝長生年十六歳、雲[ノ]上ニテ、器量、事柄優ニヤサシウ御座ケレバ、アノ立ドモ覚ズシテ涙ヲ流シテ宣ケルハ(半井本平治物語下巻、6ウ④)
- 43'、朝長生年十六歳、雲の上のまじはりにて、器量、ことがらゆふにやさしくおはしければ、刀のたてどもおぼえずして、涙をながして宣ひけるは(旧日本古典文学大系平治物語巻中、245④)
- cf、成親今年廿四歳、容儀ことがら人にすぐれてぞ見えられける(古活字本平治物語巻上、422上⑭)

源朝長は源義朝の次男で従五位下の中宮少進に任官、十六歳で亡くなった武者である。「器量」は義朝が朝長を斬る場面に用いられている。実の息子を手に掛ける父の悲劇が描写されているが、犠牲となる朝長が十六歳という若年でしかも中宮職に奉じた優美な雰囲気なたたえた公達の様子を浮かび上がらせることで、義朝の悲嘆を紙上に躍然たらしむるものである。「器量」は「優にやさしく」という述語から参考例の「容儀」と同意で(朝

長の上品で端正たる)容姿、様子を表していると解される。

44、父是ほど挙し申あひだ、やうあるべしとてめされけり。きりやう、ことがら、つらたましむ、誠いかめしげなるもの也(旧日本古典文学大系保元物語巻上、81⑬)

44'、父、これ程挙し申すあひだ、様あるべしとて、召し出ださる。気色、事柄、頼魂、実にかめしげる者なり(日本古典文学全集保元物語巻上、250⑯)

cf、(為朝)見物の者共是をみて、あな恐のけしき、ことがらや。理にこそ多人種をも亡てしけれ(旧日本古典文学大系保元物語巻下、173⑰)

無双の弓矢の達者で性剛毅の大男である源為朝の風貌を描いている場面である。例44「器量」に対して他の写本である同じ箇所では例44'のように「気色」となっている。また、参考例のように、同じ『旧日本古典文学大系保元物語』巻下に見えた為朝の容貌についての描写においても「けしき」が用いられている。「気色」の示す意味、更に共起する「誠いかめしげる」という述語を合わせて勘案すれば、「器量」は為朝の荒々しい風貌、様子という意味を表している。既に奈良時代に散見された「容貌魁偉」の翻案とも思われる。

次の例は同時代の和化漢文に続いて和漢混淆文に現れた「御器量」と「器量人」である。

45、新院崇徳二同宿シテヲハシマシケルガ、イタクサタマシク御アソビナダアリトテ、即位ノ御器量ニハアラズトヲボシメシテ(愚管抄四、216⑳)

46、笛のおん器量たるによって、此宮御相傳ありけり(覚一本平家物語巻四、大衆揃、307㉑)

46'、此の宮、笛の御器量たるによって御相伝ありけるとか也(十二卷本平家物語、大衆揃)

47、外國人タリトイヘドモ、^{げんし}元子器量人ナリト云テコレヲ請ズ(正法眼藏随聞記、317㉒)その意味も和化漢文のそれと異なるものではないと思われる。

以上、鎌倉時代における「器量」について文章ジャンル別に考察してみたところ、その意味としては、基本的に前の時代のそれをそのまま受容していると言ってよい。それを次のように記述できるかと思う。

(一)、度量、人徳、適任等を含めての才能、力量

(二)、優れてよいこと、様子、容貌

と二つに大別できる¹³が、更に言えば(一)人の内在的な側面が濃厚に具わっているのに対して、(二)物事の(立派、優れるということも随伴する)外見的な様相という意味特徴を呈している。又、形容詞として使用されていることも判明した。平安時代に続いて中国語の「器物の容量、容積」という原義は依然として検出できなかったものの、「心の広さ」という意味特徴が出自となる中国語のまま依然として残っている。これは単なる「才能、能力」と異なるところであろう。一方、中国語には見えなかった(二)は日本語において意味が変わって、意味転用の変化が生じたものである。

続いて室町時代の「器量」については紙幅の関係で来田氏の論考¹⁴に委ねて割愛するこ

ととするが、その補足として下記の例のように次のことを指摘しておきたい。

48、依_レ少生御器量拔群_一大概注進也（異制庭訓往来、1140上⑨）

前の時代に続いて「御器量」という日本語の独自の語形が依然として使われているが、「拔群」という述語からそれは能力、才能という意味を表し、だから「注進」されたのである。つまり、「器量」は前代と同じく何かの役を選任するに際して人徳等を含めての才能、力量を見込んで選ばれるのにも用いられる。下記の例も同様である。

49、未處分之跡。随_レ奉公之浅深_一、糺_シ器量之勘否_ヲ。可_レ被_レ配分_一（新札往来、477⑫）

50、家中諸奉公人の内仮令不_レ器量₁₅無朝榜（不調法）に候とも、一心健固の輩には別して可_レ被_レ加_二愛憐_一候（武家家訓・遺訓集成、朝倉敏景十七箇条）

cf、代々持来候などとして、無器用の人に団并に奉行職被_レ預間敷事（同上）

例50の同じ家訓において「不器量」と「無器用」が同時に使われている以上、制定者は両語について意味的に使い分けようとする意識があったように見える。つまり、前述したように、「器量」は単なる才能、力量に止まらず、度量、人徳等も随伴している。それは清原宣賢の孫である枝賢人の『式目抄』において次のような「器量」についての解説からも察知される。「器量トハ君臣上下トモニ其ノ^{ウツハモノ}器ニカナヒタルヲ用ラル、ナリ（略）君ハ君タル御心マシマスヲ器量ノ主君ト申シ臣ハ臣タル道ニ心ヲソメテ臣タル理ニヨク叶タルヲ器量ト云ナリ」（国立国会図書館蔵、64才⑥）。対して、「器用」は物事に役立つ能力のみとなる。斯様な意味的差異があって初めて同一文献において「器量」と「器用」とが共存している所以であろう¹⁶。下記の例の「器量」と「器用」も同様である。

51、当時鉄砲肝要ニ候間、向後、略_{シテ}長柄_ヲ撰_ビ器量之足輕_一、鉄砲持参、併可_レ為_二忠節_一（甲陽軍鑑、品第三十八309①）

cf、無足なる人一人も候はで、縦常には器用だてなしとも意地きたなしとは申がたし（同上、品第十三200⑩）

「器量」は後続文の「併可_レ為_二忠節_一」を併せて考えると、能力だけではなく、忠誠心も伴っていると解されるが、「器用」は才能のみとして用いられている。なお、「器用」の意味用法については別稿にて考察することとする。

亦、容姿、風貌等という外見的な意味を表す「器量」は近世に下り、その表記が揺れ、意味に基づいて一時的に「標致、嫵致」等となっていたが、定着には至らなかった¹⁷。

結び

以上、中国語と比較しながら日本語における「器量」の意味用法について考究してきたところ、以下のことが明らかになったかと思う。「器量」は夙に奈良時代に登場して日本語への移入が早かったことを物語るが、その意味が出自たる中国語のままとなっている。但し、調査の不足に因るかもしれないが、今回管見に及んだ限りの日本文献には上記

した中国語の原義とも言える「容量」という意味の用例が検出できなかった。平安時代になると、中国の詩文を意欲的に模倣しようとする漢詩文における「器量」は前時代に続き中国語の意味を踏襲していると同時に、和化漢文では形容詞としての用法が生じ、視覚を通しての外見的な意味も発生するようになった。つまり、元来の中国語と比べると、意味用法の変化が起きたのであろう。その変化義はその後も時代と共に僅かながら消長しつつ今日に至ってきたとも言えよう。又、表記としても殊に和化漢文においては、その意味の変化に伴って鎌倉時代頃少量ながら「機量」、続いて近世に「標致、嫵致」等も登場したが、何れも一時的なものに過ぎず、間もなくその姿を消して、淵源となる中国と違った一面を呈している。更に、日本文献においては、中世に入ると中国語には見えなかった、「御器量」「器量人/仁/者」等のような語形式も早くも産出して、「器量」という中国語由来の素姓を持つ漢語が意味変化と共に日本語に深く溶け込んでいることを浮かび上がらせている。

以上の如く、中国語との比較を通して時代別、文章ジャンル別に一語一語考究することによって日本語における漢語の意味史の構築に資するものであろう。

注：

- 1、中国では最も広く使用されている『現代漢語詞典』（商務印書館、2006、第5版）の「器量」について「気量。度量（用例略）」と語釈されていることから示唆される。
- 2、来田隆「『器量』と『器用』」（『鎌倉時代語研究』第23輯、武蔵野書院、平12年）
- 3、筆者は平成8年度鎌倉時代語研究会夏期研究集会において「漢語の意味変化について―『器量』を中心に―」と題する発表資料を基に修正、加筆するものである。
- 4、同註2に「外貌」という変化義がすでに鎌倉時代に派生していると説いている。
- 5、同註2に「能力・力量」という意味としての「器量」と意味分析している。
- 6、中村元『広説仏教語大辞典』（東京書籍、2001）の「器量」について「精神的能力、才能」と語釈している。
- 7、山田孝雄『色葉字類抄攷略』（古典保存会、昭3）、浅野敏彦『国語史のなかの漢語』（和泉書院、1998）において『前田本色葉字類抄』における「器量」の注釈「美人分」は「善人分」の誤写であると指摘されている。
- 8、この点について同註2の論考には触れていない。中国語には「機量」の所在が見当たらないし、『日本国語大辞典』（第二版）（小学館）をはじめとする国語辞書にも「機量」が収録されていないようである。尚、このような音通によって漢字表記が変わる言葉は日本語においてよく見られるが、例えば、「譏嫌→機嫌、心神→神心」等がある。
- 9、『日本国語大辞典』（第二版）（小学館）等がある。
- 10、同註2の「能力、力量」を表すという「器量(1)」の意味記述と違っている。
- 11、岩波日本思想大系『大日本国法華驗記』の該当箇所頭注に依れば、「器量、字類抄に「美人分、キリヤウ」とあり、顔の美麗のこと」と語釈している。
- 12、吉村公宏『はじめての認知言語学』（研究社、2015、8刷発行）
- 13、同註2において鎌倉時代の「器量」の意味について以下のような三つに分類されている。①「その

地位や役割を全うすることができるかどうかという観点からみた、能力・力量、また、それを持っているもの、あるいはそれがすぐれているさま」②「その方面での優れた能力や技能」③「外貌」とある。

14、同註2

15、小沢富夫編集『武家家訓・遺訓集成』（ペリかん社、1998）において「不器量」について次のように注釈されている。「器」は材の在る所、「量」は徳の充てる所。この意味から徳量やものの役に立つ才能をいうが、『甲陽軍鑑』では人間的な魅力、人格性を含めて用いている。戦国時代における武将の人間的要件だ」とある。

16、同註2において「器用」との違いについて「室町時代になると(1)の意の「器量」は文章語的性格を持つに至った」と指摘されている。

17、「意味分化に伴う表記の問題—和製漢語の一生成過程—」（田島優『愛知県市立大学文学論集』38、平2、2）の二、「キリョー〈容貌〉の失敗」において「このようにキリョー〈容貌〉は、「器量」からの独立を試みたのであるが、再包括されてしまった。それは、キリョーと表記（「標致・嫵致・容貌・容色」）との音とが一致しておらず、常にルビが必要であったためであろう」と論述されている。

付記

ここにおいて、客員研究員をお引き受け頂いた飯島典子先生と素晴らしい研究環境をお与え下さった広島市立大学国際学部及び小論の修正に当たって貴重なご意見を賜った査読のご担当の方に対して深く感謝申し上げます。

検索文献：

本稿で調べた中日両国文献は『国文学攷』第159号に掲載された拙稿「「減氣・驗氣・元氣」小考」を参照されたい。

ーらん・ちくみん、広島市立大学客員研究員ー